

一声社：TEL03-3812-0281/FAX03-3812-0537

閑話休題—父の話

手前味噌ですみません。生きていれば 89 歳の誕生日を迎えたであろう父は、建具職人だった。小学校しか出ていないが、生涯一建具職人として生きた人だ。

父の長兄は陸軍で、終戦直後に広島で復旧作業に従事し、原爆病と思われる病で他界。次兄は、満蒙開拓青少年義勇軍としてソ満国境で戦死。父自身も、飛行機工場への空襲で危うく死ぬところだったらしい。

戦後、実家の小さな田んぼを継がず、建具職人に弟子入り。3 年間は、全く何も教えてもらえず、仕事は子守りだけ。しかし、そんな父を見かねた他の親方が引き取ってくれて、修行に励んだらしい。

「段取り八分」

父の口癖だ。仕事以外では全く無計画で、行き当たりばったり・自分の気分優先だった父だが、仕事に関しては用意周到だった。

「何事も段取りで決まるんじゃ。試験も普段の修行と準備にかかるとるわい」—子ども時代によく言われたものだ。

無口でおべんちゃらの一つも言えず、賭け事もしたがのめり込まず、怒ると怖く口よりも先に手が出た父。

その当時の親方が無理な仕事を引き受け、納期を急がされたために、仕事中に指を切断。責任を取りたくない親方に解雇され、再就職先も邪魔されて、自棄になっていた父。そんな父（というか一家）を見かねた別の親方が雇ってくれて、何とか生き延びた僕達兄弟。

日本の家が大工ではなく工場で作られるようになり、窓は木枠からサッシへ、作

り付けの無骨だが長持ちする家具よりも、洋風のお洒落な家具へ——建具店は、やがて苦境に見舞われ、父の恩人の親方は職人の給与を工面するために借金を重ねた。

父の給料が、もう半年以上も未払いだったある夜遅く。家の前に車が止まり、親方が我が家のチャイムを押した。

「すまんけどな、これから『夜逃げ』するんや。もうアカン。あんたの給料もずいぶん溜まってる。ほんまに申し訳ないけど、もうどうにもならん。これ、雀の涙でゴメンやけど、受け取ってくれへんか？」

親方は借金取りから急いで逃げなアカンのに、わざわざ遠回りをして、我が家に立ち寄ってくれたのだ。父はそれだけで大満足だった。

一家が路頭に迷う寸前だった時、「あいつを雇うなよ」と妨害されている時に、男気で雇ってくれた親方。夜逃げる緊急事態の最中でも、うちまで立ち寄ってお金を置いて行ってくれた親方。「最近の職人は、口で仕事をする。職人なら黙って腕を磨かんかい！」と、ぼそりと言っていた仕事一筋の愛想も糞もない無骨な父。

子どもの頃は「黙って耐えてるだけやから、お金がないねん！」と反発していた彼らの生き様。その良さを噛みしめるくらいには成長したのかな？と感じる今日この頃。寒空に一家を放り出したのも人、救いの手を差し伸べたのも人。世の中どうして捨てたものではない。

新刊 2 点 好評発売中！

*紙とえんぴつでおはなし 1000 円

*“紙とえんぴつでおはなし” 小道具セット 1100 円